

## 吉田初三郎と印刷折本『旭川市』『旭川市大鳥瞰図』（1936年）

田中祐未

Key Words

吉田初三郎 (Yoshida Hatsusaburo)、鳥瞰図 (Bird's-eye view map)、観光案内 (Tourism guide)、昭和初期 (Early years in the Showa era)、旭川 (Asahikawa)

## 1 はじめに

吉田初三郎 (1884-1955) は、大正から昭和にかけて、全国各地の自治体等から注文を受けて鳥瞰図つきの観光パンフレットを制作した。初三郎が生涯にわたって手がけた作品の総数は少なくとも 1600 種以上と言われるが (矢内 1999: 51)、数多くの作品のなかでも「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(印刷折本『旭川』旭川商工会議所発行、1930年に収録)は「北海道最初の都市鳥瞰図」として重要な作品のひとつに位置づけられる<sup>(1)</sup>。筆者は別稿において、『旭川』の掲載内容を確認したうえで、同鳥瞰図にみられる表現上の特徴や、その背景となる制作事情について考察した (田中 2023)。

本稿では、その6年後に発行された印刷折本『旭川市』(旭川市役所発行、1936年)と、その中に収録された「旭川市大鳥瞰図」を分析対象とする。本作も、『旭川』及び「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」と同様に旭川市の紹介を目的としており、初三郎が鳥瞰図の制作を行ったという点で共通している。しかしながら、「旭川市大鳥瞰図」と「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」は、同じ旭川市を描きながらも異なる作品に仕上がっている。本稿では両作品の比較によって「旭川市大鳥瞰図」の特徴を具体的に記述する。

初三郎の鳥瞰図は、対象地域を大きく変形して描くことで知られ、その表現上の特徴は「大胆なデフォルメ」等の言葉で語られてきた。しかしながら、初三郎が得意としたデフォルメが描写対象にどのように適用されたかということについては、なお検討の余地がある。本稿ではこの課題に取り組むための準備段階として個別作品の分析を行う。

## 2 基本情報と先行研究

## (1) 基本情報

『旭川市』は刊行物なので複数現存しているが、本稿

では、その一つとして北海道博物館が所蔵する1点(収蔵番号 158043)を分析対象とする<sup>(2)</sup>。『旭川市』は、二つ折りされた厚手の用紙と八つ折りされた用紙、計2枚の紙で構成されており、どちらの紙も両面印刷である。[図1]に示したとおり、本稿では、二つ折りの用紙を「表紙」「表紙裏」、八つ折りの用紙を「概要面」「鳥瞰図面」と呼ぶ<sup>(3)</sup>。表紙裏の左側余白に鳥瞰図面の右端が接着されており、[図1]に示した点線部分をすべて折りたたんだ状態で保管されている。

概要面には以下のような奥付がある。

発行所 旭川市役所  
昭和十一年九月二十日印刷  
昭和十一年九月二十五日発行  
著作権並/版權所有者 京都市祇園/南鳥居前 吉田初三郎  
編輯者同 田坂昇  
印刷者同 清水超太郎  
印刷部同 観光社出版部  
非売品 電話祇園五七八番

印刷部の欄にある観光社とは初三郎が起業した会社であり、鳥瞰図出版や広報誌発行などの事業を行っていた(堀田 2009: 11)。編輯者の田坂昇や印刷者の清水超太郎も、住所欄が「同」とされていることから推察できる

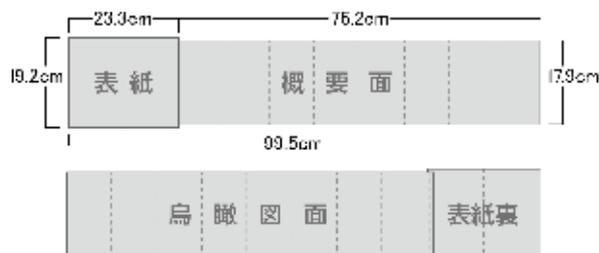


図1 各部の寸法と名称

とおり、観光社に所属した人物である<sup>(4)</sup>。また、概要面の左端には「絵に添えて一筆」という題の旭川市紹介文が掲載されており、文末は「京都祇園にて 吉田初三郎」と結ばれている。鳥瞰図面を見ると、鳥瞰図の枠内に「旭川市／大鳥瞰／図／昭和十一年／初三郎作〔よしだ〕」という署名が見られ、枠外余白の右側には「旭川市鳥瞰図」と縦書きされ、左下には「著作権並版權所有者 京都祇園 電話祇園五七八番 吉田初三郎」と記載されている。

以上の情報から、『旭川市』は旭川市役所が発行した刊行物であり、吉田初三郎率いる観光社が印刷折本の編集、鳥瞰図の制作、印刷などを担ったことが読み取れる。

## (2) 先行研究

管見の限りでは『旭川市』に関する専論はないが、藤本一美氏が作成した鳥瞰図作品目録の中に「旭川市、旭川市鳥瞰図一九三六年(再版)」という記述があり(藤本 1999:2)、これが本稿の分析対象である『旭川市』(旭川市役所発行、1936年)に該当する可能性が高い。記述中の「再版」に対する「初版」は、作品目録の同頁にある「旭川市、旭川市鳥瞰図 旭川市役所刊 一九三五(昭和十)年」を指すと思われる。しかしながら、1936(昭和11)年発行の『旭川市』が複数の場所に保管されていることは確認できるものの<sup>(5)</sup>、現段階では1935(昭和10)年発行の作例の所在を把握できておらず、その内容については確認するすべがない<sup>(6)</sup>。

『旭川市』の鳥瞰図面に収録された「旭川市大鳥瞰図」については、大阪府堺市の堺市博物館に「旭川市／大鳥瞰／図／昭和十一年／初三郎作〔よしだ〕」という署名が入った肉筆鳥瞰図が所蔵されており、年記と図様がほぼ一致することから、この肉筆鳥瞰図が『旭川市』収録の「旭川市大鳥瞰図」の原画にあたると思われる。こ

の肉筆鳥瞰図は『堺市博物館優品図録 第三集』に掲載されているほか(堺市博物館 2011:8,71)、近年では、堺市のさかい利晶の杜で開催された与謝野晶子×吉田初三郎 企画展「与謝野寛・晶子夫妻の旅ーパノラマ地図でたどる観光名所ー」(2021年11月20日～2022年1月23日)や、東京都府中市の府中市美術館で開催された展覧会「Beautiful Japan 吉田初三郎の世界」(2024年5月18日～2024年7月7日)において作品現物が展示された。(藤本 1999)にみられる1935(昭和10)年の作例の存在については不明点が残るものの、少なくとも、本稿の分析対象である1936(昭和11)年発行の『旭川市』収録の「旭川市大鳥瞰図」と同タイトルの肉筆鳥瞰図が対応関係にあることについては確かといえよう。肉筆鳥瞰図には地名表記が剥落している部分があることから、印刷折本の地名情報や描写内容を確認することは原画の情報を補足することにもつながる。

## 3 印刷折本『旭川市』の表紙・表紙裏・概要面 —鳥瞰図面以外の掲載内容—

この章では『旭川市』(旭川市役所発行、1936年、以下「1936年版」)の掲載内容を確認する。筆者は以前、『旭川』(旭川商工会議所発行、1930年、以下「1930年版」)の概要面の掲載内容が、吉田初三郎や観光社側ではなく旭川商工会議所側の既存のテキストをもとにしてまとめられた可能性が高いことを指摘した(田中 2023:192)。そこで、本研究では、1930年版を比較対象とすることにより、1936年版が1930年版を踏襲している点、あるいは変更された点を明確にする。1936年版の写真を[図2]、1930年版の写真を[図3]として掲載したので参照されたい。

図2 1936年版『旭川市』(北海道博物館所蔵)

表紙



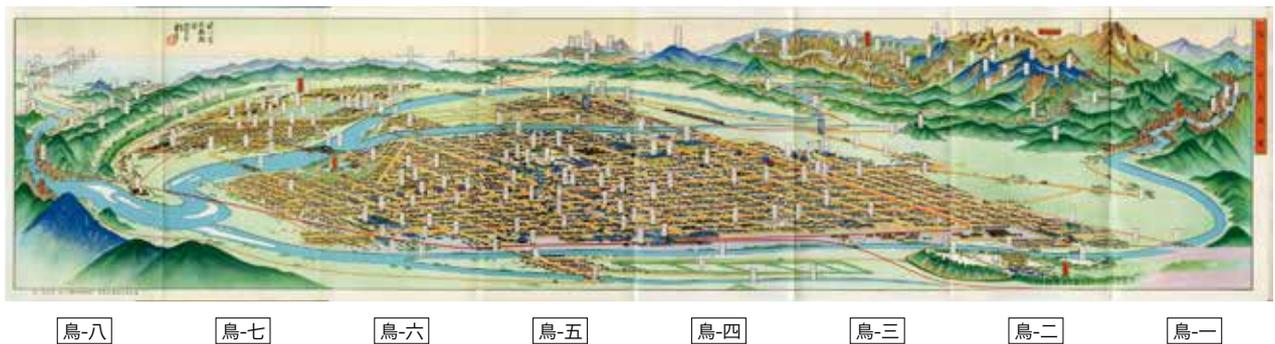
表紙裏



概要面



鳥瞰図面



※紙面に合わせてレイアウトしており、各図版の縮小率は異なる。

図3 1930年版『旭川』(北海道博物館所蔵)

表紙



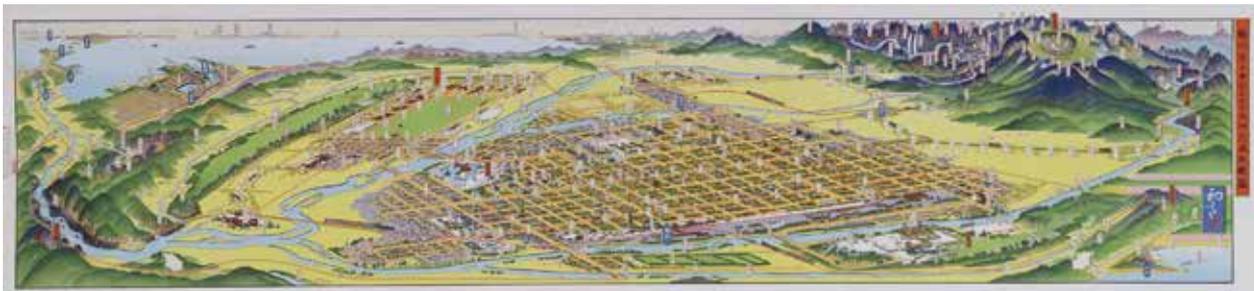
表紙裏



概要面



鳥瞰図面



※紙面に合わせてレイアウトしており、各図版の縮小率は異なる。

(1) 表紙

表紙は印刷折本をすべて折りたたんだときに外側になる部分である。二つ折りの用紙を開くと一枚の絵が現れる。1936年版の表紙は月明かりに照らされた橋の絵で、画題は明記されていないものの、形や色から判断して旭橋であることは一目瞭然である。画面左の遠景には大雪山のシルエットがある。画面左上には「旭川市」という題字、右上には「初三郎作〔よしだ〕」の署名がある。

一方、1930年版の表紙の絵は層雲峡の景色を背景として大雪山の高山植物や高山昆虫を配したもので（田中2023:182）、1936年版とは全く異なる。描写対象に対応する「層雲峡の大自然美」という題が記されている点も相違している。ただ、印刷物の体裁という観点から見れば、初三郎による見開き一枚の絵が配される点、画面内の左側に出版物の題を縦書きで配し、右側に初三郎の署名を入れる点、四辺に囲み線を入れる点など、全体的には共通点が多い。

なお、1936年版の表紙の絵については、拙稿「吉田初三郎が描いた旭橋『北方人文研究』（2024年4月末執筆終了、2024年11月現在査読をふまえて修正中、2025年3月末発行予定）において、他の旭橋関連作品と併せて考察したので、そちらを参照されたい。

(2) 表紙裏

表紙裏は二つ折りの用紙の中面にあたり、表紙の反対側の面に印刷されている。1936年版の表紙裏を見ると、右上に文章、左上に丸く切り抜かれた写真、下に四角い写真が配されている。文章は「旭川市の沿革」という題で、松前藩士が地図作成のために旭川を訪れてから北海道中部の中心都市となるまでのことを記述した後、旭川の語源にも言及している。丸い切り抜き写真は建物外観写真で「旭川市役所」というキャプションが付され、下の写真は高所から街並みを俯瞰した様子の写真で「旭川市街の一部」というキャプションが付されている。

一方、1930年版の表紙裏は内容が異なる。[図3]として掲載したのは北海道博物館が所蔵する『旭川』の写真で、表紙裏には層雲峡に関連する写真やテキストが掲載されている。1930年版には表紙裏の掲載内容だけが異なる異種本が多く存在しており、そのバリエーションには「ゴードー焼酎」「旅館越後屋」「旭川市街軌道株式会社」などがあって、それぞれの商品や施設等を紹介する欄となっている（田中2023:195）。1936年版にはこのような欄は設けられず、「旭川市の沿革」の文章内容は軽微な表記上の違いはあるものの1930年版の概一に掲載された「旭川市の沿革」とほぼ同じ内容であり、1930年版における概要面の内容が1936年版では表紙裏に移動したことになる。

(3) 概要面

概要面は八つ折りの用紙に印刷され、折り目を意識した配置で旭川市に関する情報が掲載されている[表1]。テキストについて、概一は「旭川小唄」の歌詞、概二から概四にかけて市勢紹介、概五から概六にかけて名勝紹介、概七は大雪山と層雲峡の紹介、概八は初三郎による「絵に添えて一筆」と題された旭川紹介文という構成である。写真について、概一に「師團通（鈴蘭街）」、概二に「上川神社」、概三に「神居古潭」、概四に「北鎮兵事記念館」、概七に「大雪山（上川岳と愛別岳）」、概八に「層雲峡（小函の景）」が掲載されている。

1936年版と1930年版の全体のレイアウトや構成要素は、概一を除けば非常に似通っている。概一については、先述のとおり、1930年版では「旭川市の沿革」が掲載されていたが、1936年版では表紙裏に移動し、代わりに「旭川小唄」の歌詞が追加されている。概二から概八については、市勢紹介や名勝紹介といった項目立ては変わらず、テキストと写真の配置についても、写真の切り抜き方や枠線の付け方などに細かな違いがあ

表1 概要面の掲載内容

位置	『旭川市』旭川市役所発行、1936年		『旭川』旭川商工会議所発行、1930年	
	テキスト	写真	テキスト	写真
概一	旭川小唄	師團通（鈴蘭街）	旭川市の沿革	上川神社、常磐公園
概二 概三 概四	旭川市（位置と地勢、気候、戸口、交通、商業、工業、第七師團、主なる官公衙、旭川市のおみやげ品）	上川神社、神居古潭、北鎮兵事記念館	旭川市（位置と地勢、気候、戸口、交通、商業、工業、旭川商工会議所、主なる官公衙、主なる新聞社、第七師團）	上川神社頓宮（常磐公園千鳥ヶ島）、馬術の妙技（北海道招魂場附近）、神居古潭
概五 概六	名勝、（奥付）	—	名勝、（奥付）	—
概七	大雪山と層雲峡	大雪山（上川岳と愛別岳）	大雪山と層雲峡	大雪山（上川岳と愛別岳）
概八	絵に添えて一筆	層雲峡（小函の景）	絵に添えて一筆	層雲峡（小函の景）

るものの、全体としては1930年版をほぼ踏襲している。

次に、写真を確認する。写真のキャプションを見ると、1930年版から「常磐公園」「上川神社頓宮（常磐公園千鳥ヶ島）」「馬術の妙技（北海道招魂場附近）」が削除され、「師團通（鈴蘭街）」「北鎮兵事記念館」が追加されている。ただし、キャプションが同一であっても異なる写真に差し替えられている<sup>(7)</sup>。

さらに、内容に関する共通点や相違点を確認する。概-三から概-四にかけて「旭川市」という見出しがあった二段組の文章があり、さらに小見出しで「位置と地勢」「気候」「戸口」「交通」「商業」「工業」「第七師團」「主なる官公衙」の項目が立てられている。各項目を1930年版と比較すると、「旭川商工会議所」と「主なる新聞社」が削除され、文末に「旭川のおみやげ品」が追加されている。さらに本文を比較すると、全体としては、距離を表す里数表記を粁（キロメートル）に統一する、面積を表す単位を「坪」から「方杆」に変更するといった表記の変更、句読点の打ち方の違いなど、軽微な修正が散見される。また、「戸口」に記載された戸数や人口などの数値については、1930年版では「昭和三年末調査」によるものであったが、1936年版では「昭和十年現在」に更新されており、ほかの項目においても1936（昭和11）年発行当時の状況に合わせて数値が更新されている。これらの軽微な修正や数値の更新以外に変更が見られる点としては、「交通」「工業」「主なる官公衙」の項目が挙げられる。「交通」については、1930年版では石北線が工事中でこれから全線開通の見通しであることが示される一方、1936年版においては新旭川駅から遠軽まで行くことができるという説明に変更されている<sup>(8)</sup>。また、1930年版では「市内交通機関」として旭川市街軌道の説明がなされているのに対し、1936年版では「市内及近郊交通機関」という見出しに変更され、旭川市街軌道だけでなく旭川電気軌道についての説明も加えられている。また、1930年版における「其他乗合自動車二十余台、貸切六十余台、乗合馬車、人力車等坦々たる街路を疾駆している」という記述が、「乗合自動車二條線、五條線を環走し又多数のタクシー等坦々たる街路を疾駆している」という記述に変更されている。1930年版に掲載されていた「旅客乗降数及物資集散数の最近比較」の表は、1936年版では掲載されなくなっている。

概-五から概-六にかけて、「名勝」という見出しが付けられ、旭川市周辺の計14ヶ所について項目が立てられ、それぞれに説明文がある。項目立てを1930年版と比較すると「春光台の四季」「翠香園と矢島養鯉園」「大正橋」「下村暢生園」が削除され、「北海道招魂場」が「北海道招魂社」表記に、「常磐公園」が「常盤公園」表記

にそれぞれ変更され、「北鎮兵事記念館」「鷹栖公園」が追加されている。各項目の説明内容を確認すると、全体としては、概要面の他の箇所と同じように、単位の表記などの軽微な変更がほとんどである。説明文が大きく変わったのは「旭橋」で、1930年版では三ヶ年の継続事業として架替工事にすでに着手していることが説明される一方、1936年版では旭橋が1932（昭和7）年に竣工したという記述に変更されている。概-六の左下には奥付があり、本稿の「基本情報と先行研究」で言及したとおり1936年版の発行者や発行年月日等の情報が記載されている。1930年版では、発行所が旭川商工会議所、著作権者兼印刷者が吉田初三郎、編集兼印刷所が観光社であったが、1936年版では発行所が旭川市役所、著作権者兼印刷者は変わらず吉田初三郎だが住所が犬山から京都に変更され<sup>(9)</sup>、編集者・印刷者・印刷部はそれぞれ田坂昇・清水超太郎・観光社出版部となっている。また、1930年版の奥付には『旭川』を市内書店及び道内主要駅に於て定価一部25銭で販売する旨が記載されていたが、1936年版は非売品と明記されている。また、1930年版にはなかった電話番号が1936年版で追加されている。

概-七では「大雪山と層雲峡」という見出しが付けられ、大雪山の概要と登山路の説明、層雲峡と塩谷温泉に関する説明が掲載される。ここでも里数から粁への表記変更が認められるものの、それ以外は1930年版と同一である。

概-八には「絵に添えて一筆」という見出しで旭川市周辺の紹介文が記されている。1930年版とほぼ同一の内容で、人口が更新されている点、単位の表記が変更されている点などはこれまで見てきた変更点と同じ傾向を持っているが、大きな相違点は文末である。1930年版では、文末に発行者の旭川商工会議所会頭や副会頭、旭川市民、初三郎の師匠である鹿子木孟郎への感謝を述べる記述があったが、1936年版では削除されている。また、「昭和五年四月 日本ライン蘇江々畔の画室にて 吉田初三郎」としていた箇所については、年記が削除され、「京都祇園にて 吉田初三郎」と変更されている。

#### (4) 鳥瞰図以外の掲載内容のまとめ

以上、表紙は新しい絵に刷新されたが、それ以外の部分は基本的に1930年版をもとにしている。軽微な相違点は見受けられるものの、1930年版を大きく刷新するものではない。発行者は旭川商工会議所から旭川市役所に変更されても内容は共通点が多い。

本章の冒頭で述べたように、筆者は以前、1930年版の概要面の掲載内容が、吉田初三郎や観光社側ではなく、旭川商工会議所側の既存のテキストをもとにしてま

とめられた可能性が高いことを指摘した(田中 2023: 192)。その内容を踏襲した 1936 年版も、基本的には旭川市側がもつテキストに依拠した内容であると判断される。

#### 4 「旭川市大鳥瞰図」——鳥瞰図面の掲載内容——

本章では鳥瞰図面の掲載内容を確認する[図2][図4]。鳥瞰図面は八つ折りの用紙に印刷されており、概要面の反対側の面にあたる。折りたたまれた用紙をすべて展開すると横長の画面をもった一枚の鳥瞰図があらわれる。鳥瞰図は枠で囲まれており、枠右側の余白には、赤地・緑縁の枠に「旭川市鳥瞰図」と黒い文字で記載されている。枠外の[鳥-八]左下の余白には「著作権並版權所有者 京都祇園 電話祇園五七八番 吉田初三郎」と記載されている。枠内の[鳥-七]上部には「旭川市／大鳥瞰／図／昭和十一年／初三郎作〔よしだ〕」という署名が印刷されている。以下、鳥瞰図面に掲載された絵を「旭川市大鳥瞰図」と呼ぶ。

画面全体から見て水平方向中央・垂直方向下部に旭川駅がある。旭川駅を手前に、奥に向かって俯瞰するよう

に旭川市街地が描写されている。水平方向やや左より・垂直方向中央付近には、『旭川市』の発行所である旭川市役所が配置されている。旭川市街地を含む平地部分は横長の楕円形をなしており、周囲は山に囲まれている。画面上部の左半分には海があり、右半分には大雪山を構成する山々が連なっている。

色彩について、描写対象の属性によって大まかに色相が分けられている。すなわち、平地は薄い緑色、高台や山は濃い緑色に配色される。山は、標高が高くなるにつれて緑の濃さが増すようにグラデーションがかけられている。一部、深い青色の山がみられるが、周囲と比較して標高が高い山に多く着色されているように見える。より標高が高い大雪山の山々のなかには、山頂付近が黄土色のように着色された山も見受けられるが、これは森林限界を越えた場所を表わしているのかもしれない。層雲峡などの断崖の色も黄土に近い色で表現される。

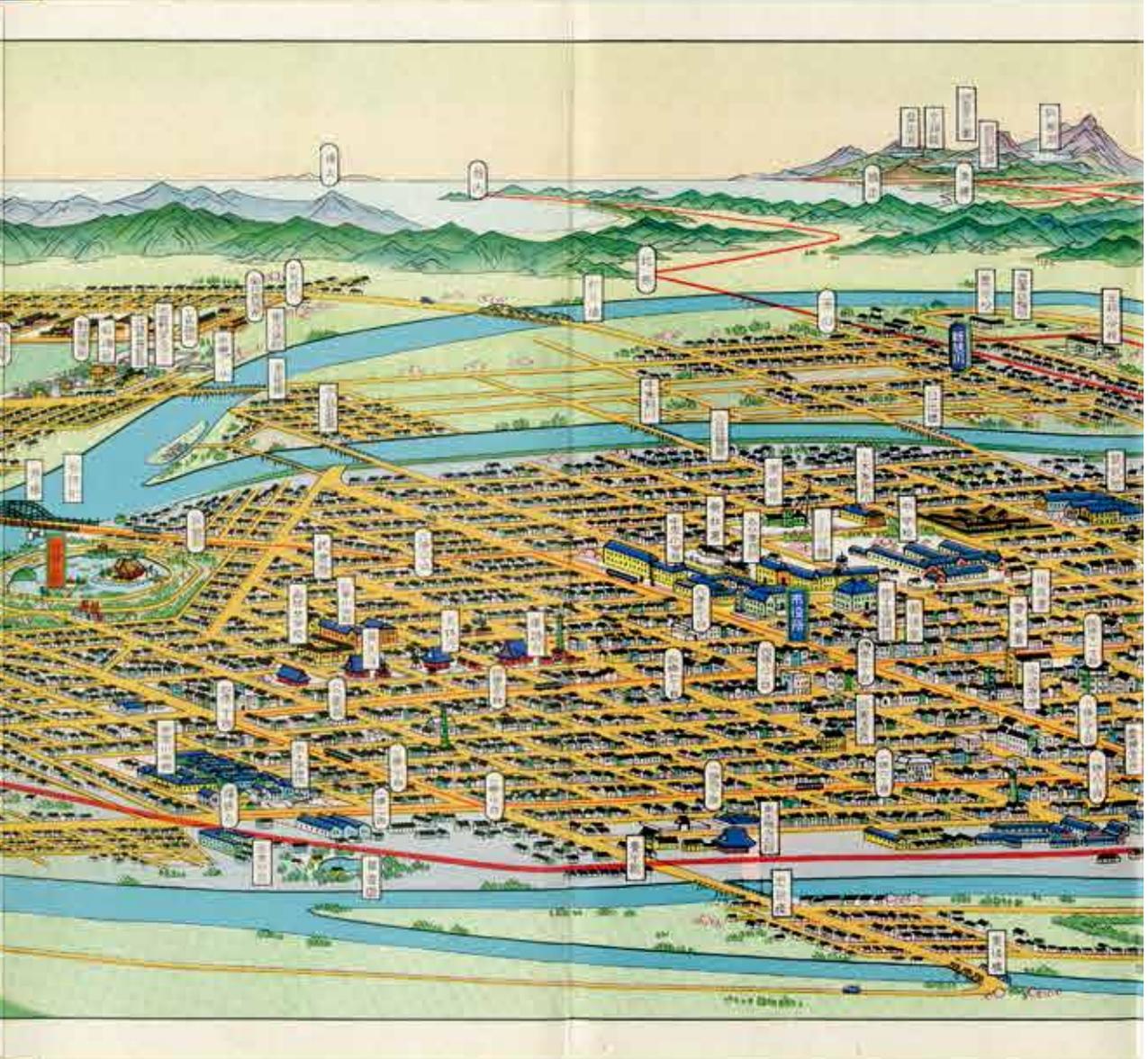
以下では、「旭川市大鳥瞰図」(『旭川市』旭川市役所発行、1936年)の描写内容をいくつかの項目に分けて分析する。その際、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(『旭川』旭川商工会議所発行、1930年)を比較対象とし、両者の差異から「旭川市大鳥瞰図」の特徴を示す。

図4 「旭川市大鳥瞰図」



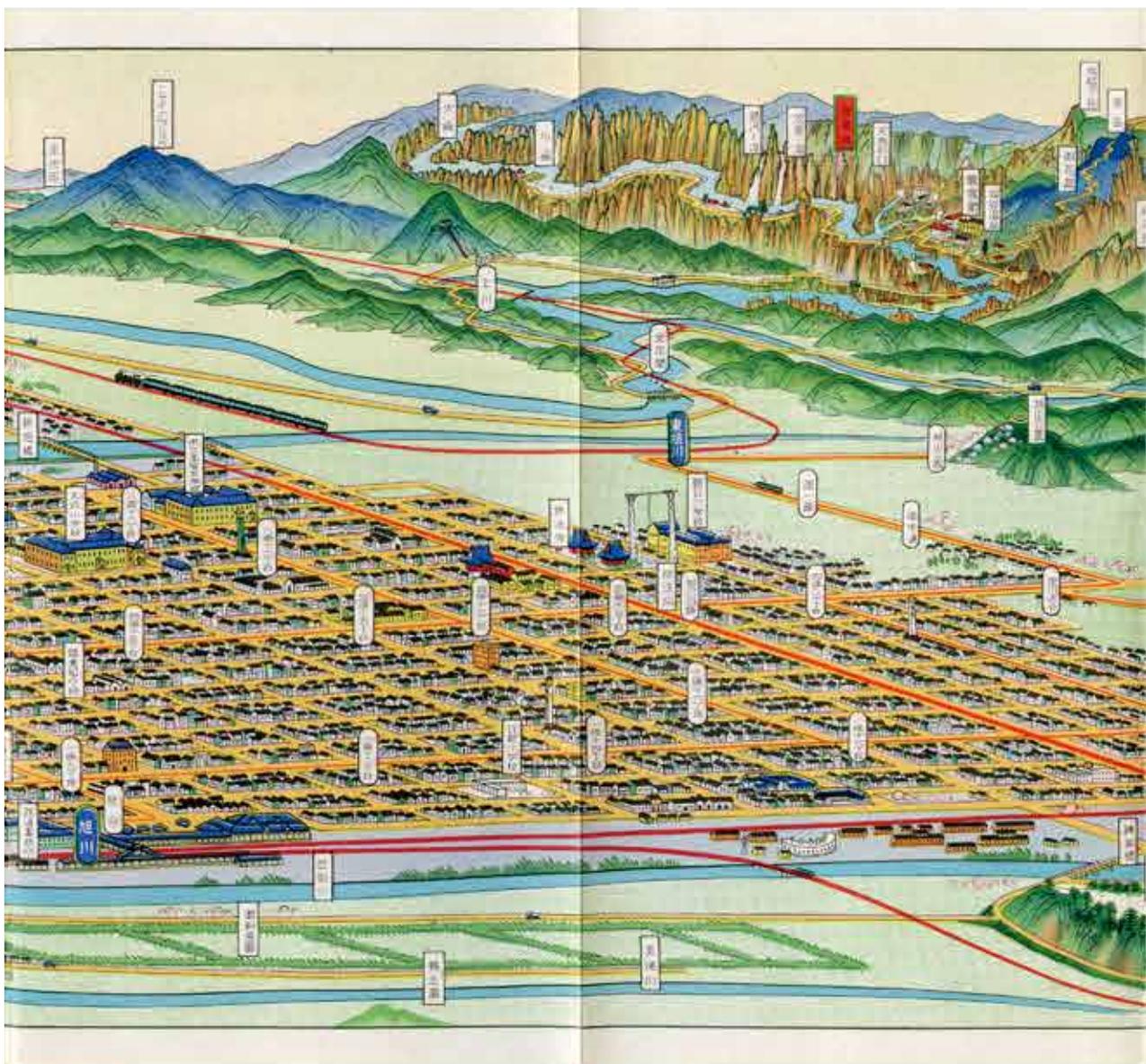
鳥-八

鳥-七



鳥-六

鳥-五



鳥-四

鳥-三



鳥-二

鳥-一

(1) 地名

まずは地名表記のデザインを確認する。地名は枠に囲まれていて、色や形状により下記のように分類される[表2]。分類は全部で4種類あり、内容に沿って筆者が分類名を付けた。なお、『旭川市』の発行者である市役所のみ他の枠と異なるデザインが採用されているので表の最下部に記載した。①と③と市役所の枠には紺色や赤

色、緑色などの有彩色が使用される一方、②と④の枠は黒と白のみの無彩色である。1930年版では①から④の4種すべての枠に有彩色が使用されているのに対し(田中 2023:190)、『旭川市大鳥瞰図』では②と④の色使いが抑えられることにより①と③を目立たせる効果が生まれている。

表2 地名分類表

分類番号	分類名	枠のデザイン(形・線・塗り・文字色)
①	主要な駅名	楕円形・黒二重線の中に緑線・紺背景・白文字(太字)
②	駅名・交通拠点	楕円形・黒線・白背景・黒文字
③	主要な地名	長方形・黒二重線の中に緑線・赤背景・黒文字
④	その他地名	長方形・黒線・白背景・黒文字
市役所	—	長方形・黒二重線の中に緑線・紺背景・白文字(太字)



分類番号①



分類番号②



分類番号③



分類番号④



市役所

続いて地名の記載内容を確認する。地名一覧表を巻末[表3]に掲載した。集計の結果、総計220件の地名が記載されていることがわかった<sup>(10)</sup>。そのうち①の枠は「旭川」「新旭川」「東旭川」の計3件で、すべて鉄道の駅名である。分類②の枠に該当するのは計81件で、「近文」「稚内」「深川」など旭川市及び北海道内の鉄道の駅名、「一條九丁目」「旭川追分」など旭川市及び近郊の路面電車の停留場名、「東京」「青森」「樺太」など北海道外の交通拠点である。分類③の枠は計7件で、「大雪山国立公園」「層雲峡」「第七師團」などのランドマークである。分類④は計128件で最も多く、「旭橋」「高等女学校」「土木事務所」など旭川市内外の建造物や施設のほか、「阿寒湖」「忠別川」などの自然の地名もある。

「旭川市大鳥瞰図」に掲載された地名数は総計220件、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」の地名数は総計323件なので、全体として3分の2程度に減っている。「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」には掲載されていたものの「旭川市大鳥瞰図」に掲載されていない地名は計130件あり、逆に「旭川市大鳥瞰図」に加えられた地名が計27件、共通して採用された地名が計193件ある。追加された地名及び共通して採用された地名については[表3]の「比較」欄に「新規」「継続」として

記載し、逆に掲載されなくなった地名については[表4]に別途示した。

なお、このあとの項目でも地名表記に言及するので必要に応じて各表を参照されたい。

(2) 交通(路線・道路など)

鉄道

まずは鉄道路線を確認する[図5]。旭川駅が鳥-四の下部に①の枠で表記され、枠の左右から赤い線が伸びている。枠の左側に伸びる路線は近文駅を通り、ところどころで分岐しながら函館や留萌につながっている。右側に伸びる路線は二本あり、うち一方は画面上部に伸び、稚内や網走方面に至る。もう一方の路線は画面下部に向かって伸び、神楽岡公園付近で画面の枠によって断ち切られている。鳥-四のやや上部、東旭川駅と新旭川駅の間には鉄道の車両が描かれている。駅名は、旭川市内およびその近郊については各駅が表記されるが、旭川市から離れるにしたがって、路線の分岐がある駅や大都市に位置する駅以外は省略されるようになっていく。画面上部、海を越えた先には路線や車両の描写はなく、青森・東京・樺太の名称が②の枠で記される。

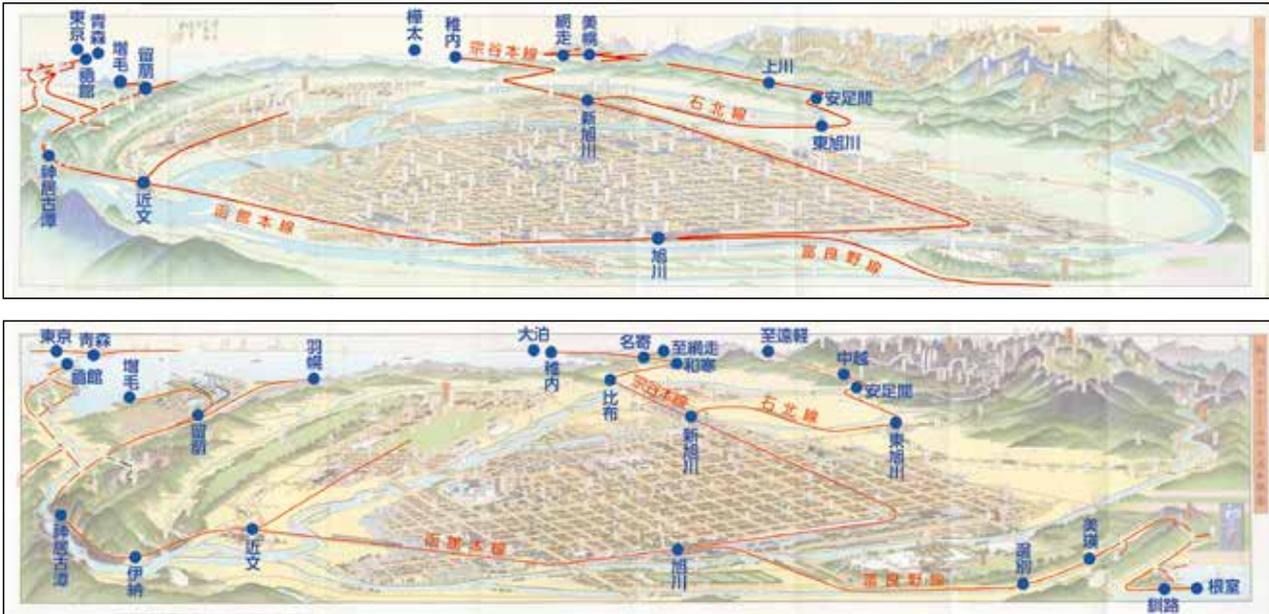


図5 鉄道路線トレース  
上:「旭川市大鳥瞰図」(1936年)  
下:「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(1930年)

※筆者作成

※地名表記等により路線が途切れている箇所について、わずかな途切れに関しては便宜上つなげてトレースした。

※路線名は鳥瞰図に記載されていないが、『伸びゆく旭川』(1929年、旭川商工会議所発行)所収の「旭川市全図」、「旭川市全図」(1931年調製、旭川市役所発行、北海道大学附属図書館所蔵)、『旭川市勢要覧』(1936年、旭川市役所発行)付属の「旭川市全図」を参照して筆者が追記した。なお、参照した地図により「宗谷本線」「宗谷線」の表記が異なっていたが、(日本国有鉄道北海道総局 1980: 87-88)を参考として本図では「宗谷本線」に表記統一した。また、旭川市域から離れた地域の路線名については図が煩雑になることを避けるために表記しなかった。

※駅名および交通拠点については、図が煩雑になることを避けるために、本文において言及したものを中心に筆者が抜粋した。

比較対象となる「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、宗谷本線の比布駅から稚内駅の間に蘭留・和寒・名寄・音威子府の各駅名が示されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では比布駅から稚内駅の間は駅名がすべて省略されている [図 6-1]。石北線について、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では東旭川駅と安足間駅の間は桜岡・当麻・伊香牛・愛別・中愛別の各駅名が示されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では間の駅名が記載されていない。また、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では中越駅より先が予定路線となり、その路線が遠軽駅に通じていたが、「旭川市大鳥瞰図」では中越駅と遠軽駅が省略され、上川駅から美幌駅に通じている [図 6-2]。富良野線について、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では辺別駅と美瑛駅を通過して狩勝高原方面に向かい、の下部において釧路や根室にまで通じていたが、「旭川市大鳥瞰図」では辺別駅に達する前に画面下辺の枠によって路線が断ち切られている [図 6-3]。函館本線について、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」ではに表記されていた伊納駅が「旭川市大鳥瞰図」では省略され、近文駅から神居古潭駅までほぼ直線で描写されている [図 6-4]。この路線をたどると、「旭

川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では留萌駅を介して増毛駅や羽幌駅に至る路線が描写されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では留萌増毛間の線は短くなり、羽幌方面の線は、羽幌駅に至る手前で山に隠されている [図 6-5]。北海道外に注目すると、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、青森を手前にして太平洋側と日本海側にそれぞれ鉄道路線が伸びており、太平洋側には東京・名古屋・京都・大阪・神戸の地名が、日本海側には新潟、伏木、下関の地名が記されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では路線はなくなり、地名表記も青森・東京・樺太の三箇所のみになっている [図 6-6]。鉄道の駅や停留場の開業・廃止時期と照らし合わせると、実際に駅や停留場がなくなったわけではないので、「旭川市大鳥瞰図」では省略されたということがわかる<sup>(11)</sup>。

地名の枠のデザインについて、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では東京・青森・函館・小樽・札幌・上川・留萌といった旭川市外の規模の大きな都市が①に相当する分類に含まれていたが、「旭川市大鳥瞰図」では旭川市および隣接の東旭川村に位置する旭川駅・新旭川駅・東旭川駅に絞られ、それ以外は②の分類に移されている [表 3]。また、「旭川市を中心とする名所交通鳥

瞰図」では、旧留萌町と雨竜炭田周辺に留萌鉄道の路線が黒線で描写されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では路線が削除され、始発と終着である恵比島駅と昭和駅のみ②の分類で記されている。

以上のように、本稿の分析対象である「旭川市大鳥瞰図」のほうが「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」よりも情報量が少ない傾向にあるものの、追加された情報もある。[鳥-八]上部では、石狩沼田駅から札幌方面に伸びる札沼線や、苫小牧駅から太平洋の海岸線に沿うように伸びる日高線が追加されている。石狩沼田駅を含む札沼線は、1935（昭和10）年に全通した路線であり（日本国有鉄道北海道総局 1980：147）、留萌本線と接続す

る（鉄道省 1937：160）。苫小牧駅は室蘭本線と日高線の接続駅である（鉄道省 1937：162-165）。

また、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、[鳥-一]に「下富良野」「至滝川」の記載がありながら、[鳥-八]にも「至下富良野」「滝川」がある。網走も同様に[鳥-一]に「網走」、[鳥-四]に「至網走」がある〔図6-7〕。一方、「旭川市大鳥瞰図」では「至」から始まる地名表記として「至帯広」「至池田」「至釧路」がみられるものの、「帯広」「池田」「釧路」記載はなく、一画面に一度しか同じ地名が出てこない<sup>(12)</sup>〔図6-8〕。





図6-4 函館本線  
 左：「旭川市大鳥瞰図」（1936年） 右：「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」（1930年）



図6-5 留萌本線、羽幌線  
 左：「旭川市大鳥瞰図」（1936年） 右：「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」（1930年）



図6-6 北海道外  
 上：「旭川市大鳥瞰図」（1936年） 下：「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」（1930年）

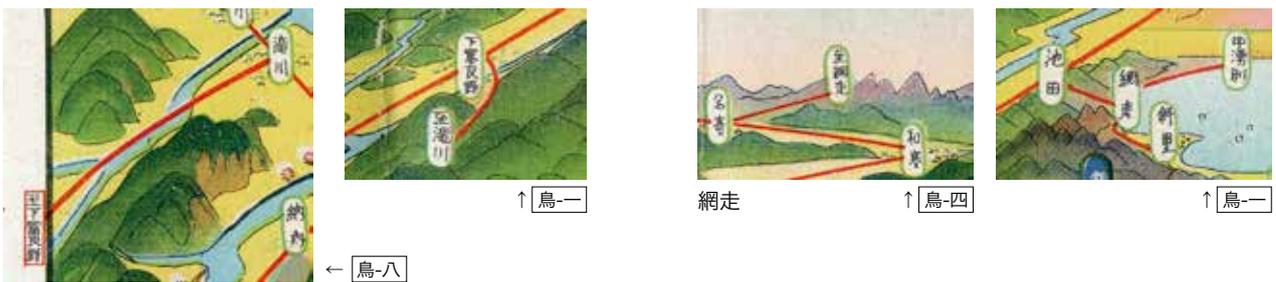


図6-7 下富良野・滝川  
 「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」（1930年）



図6-8 帯広  
 「旭川市大鳥瞰図」（1936年）

池田

釧路

### 路面電車

鉄道と同じ赤色だが、より細い線で描写されるのは路面電車である。旭川市街地の中心部を走る路線や、東旭川村の旭山公園に至る路線、東川村の市街地に至る路線がある。[鳥-二]、[鳥-三]、[鳥-五]、[鳥-六]に路面電車の車両が描かれている。

「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」や「旭川市大鳥瞰図」の発行当時、旭川市を走る路面電車には、市内を中心に走る旭川市街軌道と、市内と東川村を結ぶ旭川電気軌道の2種があった(旭川市史編集会議 2009: 146-147)。「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、旭川市街軌道は赤線、旭川電気軌道は黒線と色分けされ、路面電車の会社名も鳥瞰図内に表記されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では会社名は示されず、区別なく同じ赤線で描写されている。

停留場名について、旭川市街軌道に関しては、表記に多少の違いはあるものの両作品の間に大きな違いは見られない。一方、郊外を走る旭川電気軌道の路線については、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では「下公有地」「公有地」などの停留場名が点々と記されていたのに対し<sup>(13)</sup>、「旭川市大鳥瞰図」では、始発や終着、分岐点などの主要な停留場以外は、いくつかの停留場名が残され、それ以外は省略されている[図7]。1934(昭和9)年から1935(昭和10)年には旭川電気軌道において「西九号」「西六号」「東川学校前」などの停留場が新設されたが(新潮社 2008: 45)、これらの新設停留場も表記されていない。以上のことから、「旭川市大鳥瞰図」について、旭川市内の停留場を網羅的に記載する一方で市外の停留場については文字表記を取捨選択するという特徴が見受けられる。

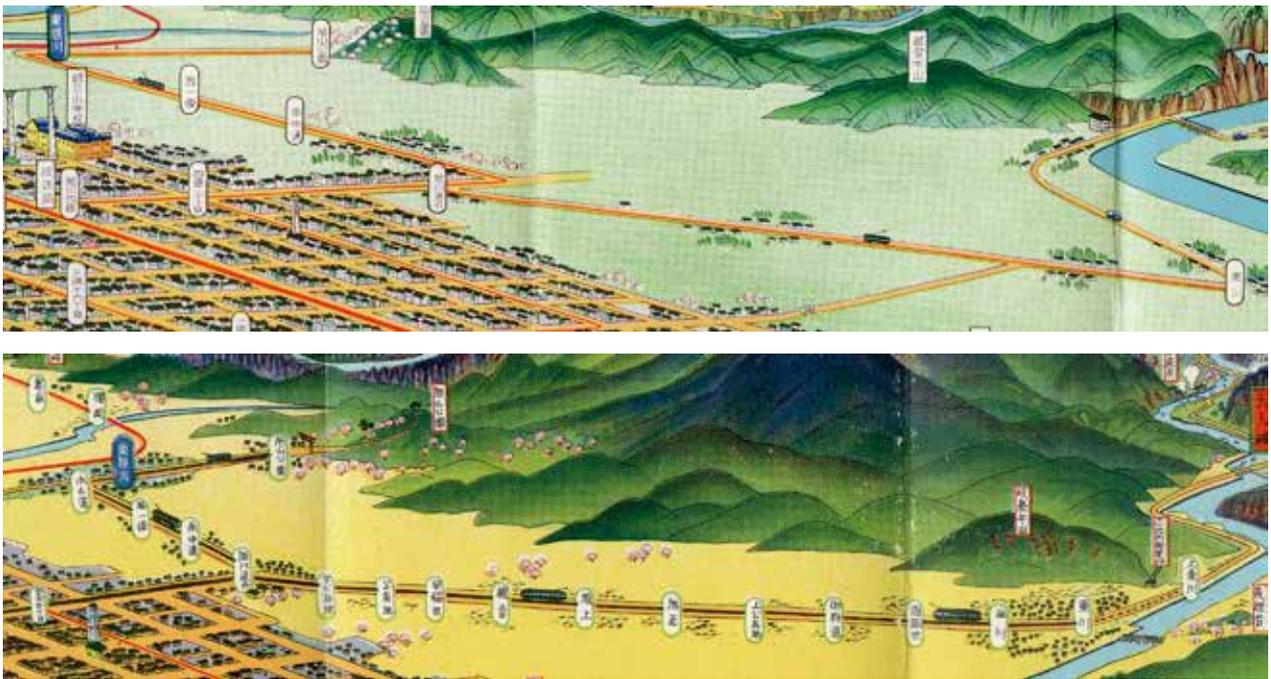


図7 旭川電気軌道  
上:「旭川市大鳥瞰図」(1936年) 下:「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(1930年)

### 道路

鳥瞰図の中央を埋め尽くすように張り巡らされたオレンジ色の太線は道路を示しており、ところどころに自動車が描かれる。道路については鉄道の駅や路面電車の停留場に相当するような文字表記はない。道路網は、画面中央にある旭川市街地に特に集中して描写されている[図2][図4]。旭川市街地からつながる道路をたどると、画面右端、[鳥-一]の大正橋を越えたところで震によって隠されている。画面左端のほうは、[鳥-八]の神居古潭の

橋付近で道路が途切れている。一方で、画面右上の大雪山国立公園周辺は自動車道のみならず登山道も描かれる。東川停留場から天人峡を通り、その先の大雪山に至るルート、安足間駅付近から愛山溪温泉に至るルート、上川駅付近から層雲峡に至るルートが描写され、旭川から大雪山の諸峰に向かう方法がいくつもあることを視覚的に示す。道路網は、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では旭川市だけでなく旧留萌町にも網目状に張り

巡らされていたが、「旭川市大鳥瞰図」ではその描写がなくなっている [図 6-5]。

### 航路

海上交通について、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では留萌港と伏木・浦塩・大泊間、函館と青森間に連絡船が描かれ、白い点線で航路が示されていた [図 8]。一方、「旭川市大鳥瞰図」では留萌港内に船のような描写が見られるものの港内にとどまっておらず、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」のような航路は示されていない。かろうじて稚内と樺太の間に白い線が引かれているが、地色となる海の色が薄く、船の描写もないため、かなり注意して見なければ線があることに気づかない。

### まとめ

交通関係における「旭川市大鳥瞰図」の特徴について、旭川市内の鉄道駅名や路面電車の停留場名は各駅が記載されるが、市外については東旭川駅などの隣接市町村の駅を除いて省略されるところが多いことから、旭川市内と国立公園以外の情報を絞る傾向にあるといえる。札沼線や石北線など新たに全通した路線が反映されるが、これらの路線も新規開業駅を網羅するのではなく、主要な駅や路線の接続駅に絞られている。

## (3) 水域 (河川・海など)

### 河川

画面上における水域の配置を検討するために、「旭川市大鳥瞰図」と「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」それぞれの水域をトレースした [図 9]。河川は旭川市街を囲むように横長画面に楕円形を描いている。大雪山周辺を見ると、鳥-三や鳥-四の層雲峡の断崖絶壁の間を流れる川、鳥-三や鳥-三の永山岳付近から愛山溪温泉の横を通る川、鳥-一の天人峡温泉の敷島の滝付近から流れる川が、それぞれ旭川市街地方面に向かって描写されている。市街地を見ると、画面手前側には美瑛川と忠別川、画面奥には牛朱別川と石狩川という複数の川が画面を横切っているが、これらの河川は鳥-六から鳥-七で合流し、石狩川となって神居古潭方面に流れ、最終的には鳥-八上部で日本海に流れ込んでいる [図 4]。

比較対象である「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」を見ると、河川の形状はいびつで蛇行している感じが強い。一方、本稿の分析対象である「旭川市大鳥瞰図」においては、旭川市街地周辺の河川については緩やかな曲線をもった幅広い川が街を取り囲んでいる。また、「旭

川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、鳥-七から鳥-八にかけて細い河川が嵐山と旭ヶ丘の間を抜けて近文演習場の高台に沿うように描写されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では河口付近がわずかに描写されるだけで上流は高台に隠されている [図 10]。一方、大雪山周辺に目を移すと、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」よりも「旭川市大鳥瞰図」のほうが川の輪郭線が複雑な形状で描写され、険しさが表現されている [図 11]。

### 海

海は鳥-五から鳥-八にかけての画面上部に描かれる。「旭川市大鳥瞰図」は前作よりも水平線の位置が低くなって海が画面上部に集約されたことにより、画面に占める海の面積が小さくなっている。海岸線をたどると室蘭駅・増毛駅・網走駅があることから判断して、鳥-五から鳥-八の海は太平洋・日本海・オホーツク海を描いたものであることが了解される。

比較対象となる「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、稚内駅が水平線と同じ高さに表記されており、その向こうにあるオホーツク海沿岸は画面上部に含まれていなかった。オホーツク海は、画面左下となる鳥-一下部に描かれていた [図 12]。「旭川市大鳥瞰図」では、稚内駅から網走駅までのオホーツク海沿岸部が湾曲した形でひと続きに描写されている点が大きな変化である。

### まとめ

「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では河川の形状に歪みが大きかったが、「旭川市大鳥瞰図」では河川の形状が横長画面に沿うように配されている。『旭川市史』によれば、市街地の水害対策のため、切替工事が1931(昭和6)年、埋立工事が1932(昭和7)年に完成した(旭川市史編集会議 2009: 150-153)。この治水事業による地形の変化が、本稿で比較してきた2作品における河川の形状の変化ほど大きな変化ではなかったことは言うまでもない。しかしながら、治水事業の成果を視覚的に表現するために画面上の川の形が整えられたと理解することは可能であろう。

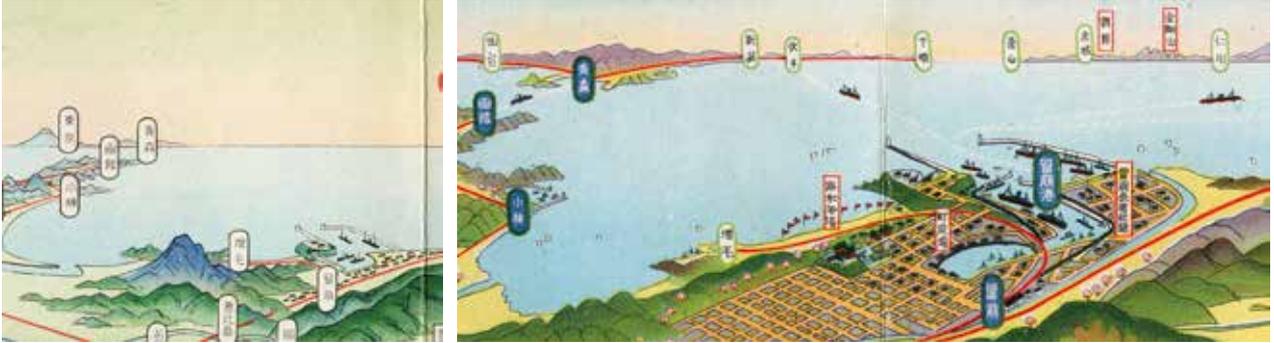


図8 留萌港周辺  
左：「旭川市大鳥瞰図」(1936年) 右：「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(1930年)

「旭川市大鳥瞰図」(1936年)



「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(1930年)

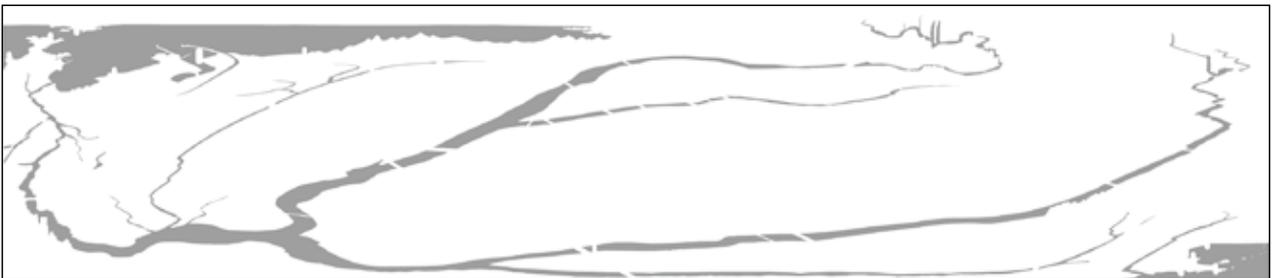


図9 海・河川トレース図

※筆者作成

※地名表記や橋の描写等により河川が途切れている箇所について、わずかな途切れに関しては便宜上つなげてトレースした。



## (5) 陸地

旭川市街地にはオレンジ色の道路網が張り巡らされているが、その周囲の旭川近郊には薄い緑色で着色された平地が広がっている。その平地を取り囲むように山が描かれている [図2]。

鳥-一から鳥-四の画面上部には、十勝岳からニセイカウシユベまでの大雪山国立公園区域が描かれる<sup>(14)</sup> [図4]。鳥-一には③の枠で天人峡が示され、松山温泉や羽衣の滝などの地名が記される。鳥-一から鳥-三には旭岳や黒岳など大雪山を代表する山々があり、石室などの登山に関する場所の名前も表記され、愛山溪温泉も描写される。鳥-三から鳥-四には層雲峡の温泉施設や景勝地名がある。加えて、鳥-五の画面上部には阿寒国立公園が描かれている。阿寒国立公園は遠景に描かれ、画面を占める面積は大きくないものの、阿寒湖や屈斜路湖などの国立公園区域内の地名と特徴的な地形が描かれている。

比較対象となる「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」には、阿寒周辺の地名や地形はまったく描かれていない。阿寒が大雪山と共に国立公園に指定されたのは1934(昭和9)年なので(旭川市史編集会議 2012:228)、同作の制作当時にはまだ国立公園ではなかったのである。「旭川市大鳥瞰図」では大雪山国立公園と阿寒国立公園がひとつのまとまりとして見えるように画面構成が工夫されている。阿寒国立公園に通じる釧路駅も、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では鳥-一に表記されていたが「旭川市大鳥瞰図」では鳥-五に移動し [図12]、阿寒国立公園の地名表記の隣に「至釧路」と記載されている。

麓の温泉郷から大雪山に登る道筋は、「旭川市大鳥瞰図」のほうが「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」よりも一つ多い。「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、大雪山に登る道筋は2ルートが示されていた。一つが、旭川市街地から上川駅を経由し、層雲峡温泉を起点として大雪山に登るルートである。もう一つは、旭川市街地から東川を経由し、天人峡を起点として登る方法である。「旭川市大鳥瞰図」では、これらの他に、安足間駅付近から愛山溪温泉に向かい、愛山溪温泉を起点として登山するルートが追加されている。ルートの追加によって周辺の描写に変化が生じている。「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、安足間駅と上川駅は鳥-三においてほとんど隣接して表記されているが、「旭川市大鳥瞰図」では鳥-三から鳥-四にかけて距離をとって駅名が配置されている。愛山溪温泉周辺の鉄道・

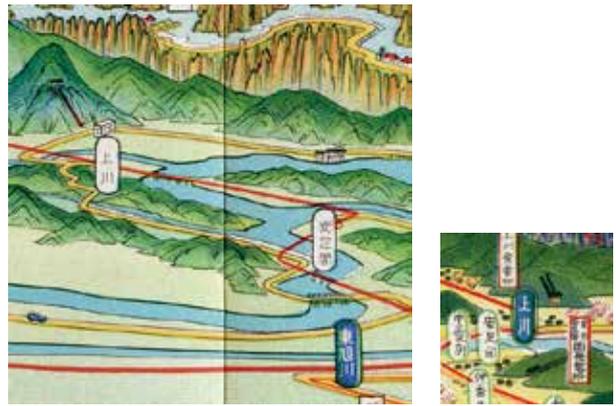


図13 安足間駅—上川駅周辺

左：「旭川市大鳥瞰図」(1936年)

右：「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(1930年)

道路・河川などの関係性を確認できるように描写が変化している [図13]。

山の描写も大きく変化している [図14]。「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では大噴火口が非常に大きく描かれ、それ以外の山は大噴火口を取り囲むように稜線が重ねられ、側面にはわずかに山肌が描かれるのみであった。形状は単純な山形のものが多く、それぞれの山の特徴を表現するような意図はあまり感じられない。一方、「旭川市大鳥瞰図」では、山の中腹や麓付近の様相が具体的に描かれ、地形的特徴を区別して描こうとする意図を汲み取ることができる。永山岳や比布岳<sup>(15)</sup>、北鎮岳には登山路を示す点線が追加されている。大雪山のなかで最も標高が高い旭岳は、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では他の山のほうが高いように描かれ、大噴火口付近と比較すると印象が弱くなっていたが、「旭川市大鳥瞰図」では旭岳が最も高くなるように描かれ、山の中腹の地形が線描を用いながら写實的に描写されている。雲の平や沼平付近の平坦な部分、山の斜面の急峻な部分などが「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」よりも格段に明瞭に描写されている。大雪山周辺の地名は、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」と比較すると表記されなくなった地名が少なくない [表4]。

国立公園以外の山については、岐登牛山を除いて山を表す地名表記はなく、描写内容を観察しても実際の山の特徴を捉えて描こうとしているようには思われない。東京付近に描かれた富士山だけはシンボリックに描かれているが、それ以外の山については、山を特定して描くというよりも、旭川が周囲を山に囲まれた盆地にあるという地形上の特徴を示すために配置されているように見える<sup>(16)</sup>。



図14 大雪山  
上:「旭川市大鳥瞰図」(1936年) 下:「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(1930年)

### (6) 旭川市街地・施設・名所など

画面の中心部では、平地に張り巡らされた道路網の網目の間にびっしりと建物が敷き詰められ、そこが市街地であることが示されている。また、市街地の建物の壁面はさまざまな色で着色されるが、屋根の多くは黒で統一されている。ただし、目印となるような建物については深い青色の屋根で描かれる。

市街地と市域の関係を確認するために、「旭川市大鳥瞰図」の年記と同じ時期の「旭川市全図」を参考にして1936(昭和11)年時点における旭川市域を図示した[図15]<sup>(17)</sup>。道路を表すオレンジ線の密集部分が旭川市域と概ね一致する<sup>(18)</sup>。画面上の配置を見ると、市域は横方向には[鳥-一]から[鳥-八]まで広がっており、「旭川市大鳥瞰図」という作品名のとおり旭川市域が画面の中

心をなしていることがわかる。ただし、右方向に進むにつれて先細りになっており、市街地だけが画面を構成しているわけではないことも読み取れる。先細りになった[鳥-一]から[鳥-五]の上部には、阿寒国立公園と大雪山国立公園を構成する諸峰が描かれ、その集合体は直角三角形のような形としてとらえられる。旭川市域は、1934(昭和9)年に指定された国立公園を描くために左側に寄せられていると考えられ、国立公園も市外にありながら「旭川市大鳥瞰図」の主役の一つであることが読み取れる。

旭川市街地と郊外の間関係を見ると、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」では、市街地に密集する道路網はオレンジ色、郊外の平地は黄色に着色され、両者はどちらも色相が近似していたために、画面から離れて作品を見た場合に市街地をひとかたまりとして認識することは

阿寒国立公園・大雪山国立公園



図15 旭川市域  
『旭川市勢要覧』(旭川市役所発行、1936年) 付属の「旭川市全図」を参照して筆者が作成した。

難しかった [図3]。それに加えて、「旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図」では第七師団練兵場・御料苗圃などの敷地や上川神社・春光台付近などの高台が周囲の黄色と色相的に離れているために [図10]、離れて作品を見ると画面上の至るところに目立たせたい要素が点在するように見えていた。「旭川市大鳥瞰図」の場合は、平地の色が薄く、色相が薄緑色に着色されており、オレンジ色の道路に囲まれた旭川市街地の形状が浮かび上がって見える効果が生まれている。

市内の施設について、「旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図」では合同酒精會社・小樽山酒造場・北の釀造元・北日本釀造會社・大谷酒造店・日本清酒會社などの酒造とヤンマー発動機支店が掲載されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では掲載されていない [表4]。また、第七師団関連施設である架橋演習場・工兵第七大隊・軽重兵第七大隊・野砲兵第七聯隊や、その付近にある競馬場が表記されなくなっているが、これらは北鎮兵事記念館・市営野球グラウンド・市営プールなどの新しい施設と地理的に近いため、「旭川市大鳥瞰図」では後者が優先されたものと思われる [表3]。小学校については、鳥-五に正和小学校が追加されている。1932(昭和7)年、永山村の一部旭川市編入にともなって公立永山第二尋常小学校は旭川市立正和小学校と改称され、「旭川市大鳥瞰図」で旭川市内の小学校として追加されたものと思われる(旭川市永山町史編集委員会 1962: 994)。

市外の施設について、「旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図」では留萌港と雨竜炭田に関係する施設が大きく描写されていたが、「旭川市大鳥瞰図」では留萌港はかなり小さくなって描写され、雨竜炭田は地名だけでなく描写そのものも削除されている。そのほか、市外の発電所4件とスキー場2件がすべて省略され、自然の地名や名所なども省略されている。鳥-一の都市部に目を向けてみると、「旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図」では、札幌駅と小樽駅付近に桜、定山溪には湯けむり、小樽駅の右側には港と船、室蘭駅付近の海には船の帆らしき描

写があったが、「旭川市大鳥瞰図」ではこれらがすべてなくなっている。色彩からみても、「旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図」では陸の黄色や駅名の枠の色、桜の色など色数が多かったが、「旭川市大鳥瞰図」では駅名が無彩色になり、山・平地・海の色がいずれも青みがかり色相的に近似しているため、旭川市街地よりも目立たなくなっている。

以上のように見ていくと、「旭川市大鳥瞰図」の施設名等の掲載方針が見えてくる。すなわち、ひとつは旭川市内にある施設名を優先することであり、もうひとつは市営などの公的な施設を優先するということである。「旭川市大鳥瞰図」の発行所は旭川市役所であり、市の新規事業を紹介する役割を本鳥瞰図が担っていることが背景のひとつと考えられる。

旭川市内と市外の地名の分類をみると、「旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図」と「旭川市大鳥瞰図」では、①と②の分類に違いが見られる。「旭川市大鳥瞰図」では、①の枠のデザインは、旭川・東旭川・新旭川の駅名に限られている。それぞれの位置を確認すると、旭川駅と新旭川駅は旭川市内<sup>(19)</sup>、東旭川駅は東旭川村に位置している。「旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図」を見ると、東京・青森・函館・札幌等の、旭川市から距離のある主要な交通拠点も分類①に含まれていた。1930年版と「旭川市大鳥瞰図」を比較すると、計7件の地名が分類①から②に変更されている。これらの違いが鳥瞰図の図様に与えた効果をみると、「旭川市大鳥瞰図」においては紺色の地色がついた枠が画面の中央に近い旭川市街地周辺に集中し、それ以外の白黒の枠が周辺に点在するようになっていく。

## 5 まとめ

本稿では、印刷折本『旭川市』(旭川市役所発行、1936年)及び「旭川市大鳥瞰図」について、『旭川』(旭川商工会議所、1930年)及び「旭川市を中心とせる名

所交通鳥瞰図」の比較分析を行った。その結果、次のことが明らかになった。

第一に、『旭川』(旭川商工会議所、1930年)との間に、印刷折本全体の仕立やレイアウト上の大きな変化はみられない。内容面でいえば、表紙裏と概要面は軽微な修正が行われただけである。刷新されたのは表紙と鳥瞰図、すなわち初三郎の絵画作品にあたる部分である。

第二に、「旭川市大鳥瞰図」は、描写対象とする地域の範囲は「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」とそれほど変わらないが、強調する場所とそうでない場所の差がより大きくなっている。「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」においては、旭川市と留萌港の接続や、その先の航路との接続など、旭川市とまわりの地域との関係性が作品の主題のひとつであり、強調される要素が多かった。一方、「旭川市大鳥瞰図」では旭川市内と大雪山国立公園区域内に焦点が絞られている。「旭川市大鳥瞰図」において新たに掲載された地名のうち、市内の地名は公設質屋・市診療所・市営プール・金星橋等、1930(昭和5)年から1936(昭和11)年の間に新たに創設されたり建築されたりした地名が多く、また公共事業に関するものが多いという特徴が見受けられる。また、秋月橋や正和小学校については、1932(昭和7)年に永山村の新旭川地区が旭川市に編入されたことによって旭川市所管となった地名である(旭川市史編集委員会 1959:9)(旭川市永山町史編集委員会 1962:994)。旭川市内であるかそうでないかという点が情報を掲載するか否かの判断基準となっているのである<sup>(20)</sup>。国立公園についても、大雪山国立公園区域内の愛山溪ルートが追加されたほか、阿寒国立公園区域内の地形や地名が追加されている。結果として、「旭川市大鳥瞰図」のほうが、強調する場所と省略する場所の違いがより明確になり、旭川市や大雪山国立公園がより際立つようになっている。

本稿では、同じ地域を画題とした初三郎の作品において、情報の取捨選択や色彩の変更などが行われた事例を確認した。本稿の冒頭で述べたように、初三郎の鳥瞰図は「大胆なデフォルメ」が表現上の特徴であると捉えられてきた。そのデフォルメの方法は、「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」と「旭川市大鳥瞰図」では大きく変化している。本研究だけでは、2作品にみられるデフォルメの違いが、初三郎の表現方法が年を追うごとに変化したことによるものなのか、あるいは前回作品との違いを出すために行なわれたことなのかを判断することは難しい。今後は、初三郎による他作品の調査を進めることが課題である。

## 表記

引用部分について、原則として旧字体を新字体に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。ただし、地名などの固有名詞については旧字体をそのまま採用した。また、引用部分の改行箇所を「/」で表した。

概要面と鳥瞰図面の掲載図版は、解像度を高くするために分割撮影後に連結させた画像である。折り目付近で連結処理を行ったため、その部分にわずかなズレが生じている箇所があることをお断りしておきたい。

## 謝辞

本研究にあたり、次の方や機関からご協力を得ました。記して御礼申し上げます。

大澤真理子氏、佐藤卓司氏、杉山一彦氏、矢内一磨氏、旭川市中央図書館、旭川市博物館、小樽市総合博物館、堺市博物館、さかい利晶の杜、函館市中央図書館、府中市美術館、北海道大学附属図書館、北海道立図書館

## 註

- (1) (吉田 1930:252) に収録された「吉田初三郎先生作品頒布会種目内容一覧」に、「北海道最初の都市鳥瞰図」として紹介されている。(田中 2023:202-203) 参照。
- (2) 北海道博物館には『旭川市』が2部保管されており(もう1部は収蔵番号164956)、内容は同一である。ただし、(収蔵番号158043)の鳥瞰図面にみられる誤植が(収蔵番号164956)にはないことから判断して、両者は異なる刷りと考えられる。
- (3) 「表紙」「表紙裏」という呼称は、初三郎の活動や制作活動の報告を目的として発行された広報誌『観光春秋』にならった(第八号号外、1930年4月、国際日本文化研究センター所蔵)。拙稿(田中2023)においても同様の考えから同じ表記を用いた。
- (4) (武田 2019:58)によると、1933(昭和8)年の「神奈川県観光連合会会務日誌」の中に「京都観光社田坂氏来庁」の記述があるという。この記述は田坂昇を指していると思われる。また、(武田 2019:44)に清水超太郎が観光社の人物であることが記載されている。
- (5) 北海道立図書館と函館市中央図書館が所蔵する『旭川市』も、発行年は1936(昭和11)年である。また、(弥永 2011:48-49)には「旭川市大鳥瞰図」の図版が掲載されているが、この鳥瞰図内の署名にも「昭和十一年」の年記がある。
- (6) 1935(昭和10)年発行の旭川関係の鳥瞰図としては『旭川要覧 及職業別優良商店案内』が確認できるが、発行所は北日本日日事業部であって旭川市役所ではない。同書のなかには『旭川』(旭川商工会議所発行、1930年)の概要面と鳥瞰図面が収録されており、「附録鳥瞰図中変更分」として1935年現在の情報が補足されている。
- (7) なお、1930年版の概-七の写真には「大雪山(上川丘と愛別岳)」というキャプションが付されていた箇所について、1936年版では「大雪山(上川岳と愛別岳)」に変更されているが、これは内容変更ではなく誤字の修正と思われる。

- (8) 1936年版の概要面には「石山線」と記載されているが「石北線」の誤記と思われる。
- (9) (益田 2009: 97) には「初三郎の本籍地・京都には、画室および初三郎の本宅があった。昭和11年に犬山・蘇江画室解散後、観光社の本拠は京都・八坂神社南鳥居そばに置かれた。」とある。
- (10) 鳥瞰図面下部、鳥-四と鳥-五の間に一つだけ枠なしで「警察署」の地名が記されているが、誤植と思われるのでカウントしなかった。
- (11) 開業・廃止時期については(新潮社 2008)を参照した。
- (12) 鳥-八の「神居古潭」は2つあるが、一方は鉄道の神居古潭駅、もう一方は名勝としての神居古潭の地名を示している。
- (13) 1930年版では、「東川」の停留場から「上東川」に至る点線が伸びていたが、1936年版では削除されている。予定路線だったが実現されなかったのかもしれない。
- (14) 大雪山国立公園の区域については(北海道景勝地協会 1936: 7)に掲載された「大雪山国立公園案内図」を参照した。
- (15) 鳥瞰図では「北布岳」と表記されているが、「比布岳」の誤記と考えられる。
- (16) 堀田典裕氏は、大正13年版の『鉄道旅行案内』の挿絵として描かれた初三郎の鳥瞰図作品群を分析し、構図を5種のパターンに分類している。そのうち、「構図Ⅳ」について「特定の盆地または平野が、画面中段上部に描かれた遠景となる山並みと、下段に描かれた近景となる水面によって囲い込まれるように描かれている」と指摘する(堀田 2009: 50)。この指摘は本稿における「旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図」と「旭川市大鳥瞰図」の両方に見出すことが可能だが、「旭川市大鳥瞰図」のほうが形状が単純化され、よりわかりやすく視覚化されている。
- (17) 『旭川市勢要覧』(旭川市役所発行、1936年)付属の「旭川市全図」を参考とした。
- (18) 鳥-五下部の神楽村域、上部の永山村など、旭川市域との境界付近の市街地については例外的に描写されている。
- (19) 新旭川駅は永山村に位置していたが1932(昭和7)年に旭川市に編入された(旭川市永山町史編集委員会 1962: 388)。
- (20) 市域の変化については(旭川市史編集委員会 1959: 6-7)所収の「旭川市区域変遷図」(1957年、旭川市都市計画課複製)に示されている。

## 参考文献

- 吉田 1930: 吉田初三郎『絵に添へて一筆集——旅と名所』上巻, 観光社, 1930年.
- 鉄道省 1934: 鉄道省編『昭和九年十二月十五日現在 鉄道停車場一覽』川口印刷所出版部, 1934年.
- 鉄道省 1936: 鉄道省編『日本案内記 北海道篇』博文館, 1936年.
- 鉄道省 1937: 鉄道省編『昭和十二年十月一日現在 鉄道停車場一覽』川口印刷所出版部, 1937年.
- 北海道景勝地協会 1936: 『北海道の国立公園と景勝地』北海道景勝地協会, 1936年.
- 旭川市史編集委員会 1959: 旭川市史編集委員会編『旭川市史第一巻』旭川市役所, 1959年.
- 日本国有鉄道北海道総局 1980: 『北海道鉄道百年史 中巻』日本国有鉄道北海道総局, 1980年.
- 旭川市永山町史編集委員会 1981: 旭川市永山町史編集委員会編『永山町史』旭川市, 1981年.
- 藤本 1999: 藤本一美『北海道の鳥瞰図一覽』私家版, 1999年.
- 矢内 1999: 矢内一磨「吉田初三郎—その生涯と作品—」『パノラマ地図を旅する—「大正の広重」吉田初三郎の世界—』堺市博物館, 1999年, pp. 49-53.
- 原口 2000: 原口隆行『日本の路面電車Ⅱ: 廃止路線・東日本編』JTB, 2000年.
- 新潮社 2008: 『日本鉄道旅行地図帳 Ⅰ号 北海道』新潮社, 2008年.
- 旭川市史編集会議 2009: 新旭川市史編集会議編『新旭川市史第四巻・通史四』旭川市, 2009年.
- 堀田 2009: 堀田典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む 描かれた近代日本の風景』河出書房新社, 2009年.
- 益田 2009: 益田啓一郎『美しき九州 「大正広重」吉田初三郎の世界』海鳥社, 2009年.
- 堺市博物館 2011: 『堺市博物館優品図録 第三集』堺市博物館, 2011年.
- 弥永 2011: 弥永芳子『北海道の鳥瞰図 空から眺めた大正・昭和期の103市町村と樺太の街並』中西出版, 2011年.
- 旭川市史編集会議 2012: 『新旭川市史 第五巻 年表・索引』旭川市, 2012年.
- 田中 2023: 田中祐未「吉田初三郎と印刷折本『旭川』『旭川市を中心とせる名所交通鳥瞰図』」国際日本文化研究センター『日本研究』第66集, 2023年, pp. 179-213.
- 武田 2019: 武田周一郎「「神奈川県鳥瞰図」の作成過程と利用の実態」『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』46号, 2019年, pp. 41-60.
- 府中市美術館 2024: 『Beautiful Japan 吉田初三郎の世界』府中市美術館, 2024年.

表3 「旭川市大鳥瞰図」(1936年)に掲載された地名の一覧

分類	地名	市内外	位置	比較	備考
①	東旭川	市外	鳥-三	継続	
①	旭川	市内	鳥-四	継続	
①	新旭川	市内	鳥-五	継続	1932年旭川市に編入
②	東川	市外	鳥-一	継続	
②	北鎮岳	市外	鳥-二	継続	
②	旭山公園	市外	鳥-三	継続	
②	安足間	市外	鳥-三	継続	
②	西一條	市外	鳥-三	継続	
②	南中通	市外	鳥-三	継続	
②	旭川追分	市外	鳥-三	継続	
②	四條二十丁目	市内	鳥-三	継続	
②	旭川四條	市内	鳥-三	継続	
②	四條十七丁目	市内	鳥-三	継続	
②	三條十六丁目	市内	鳥-三	継続	
②	一條十六丁目	市内	鳥-三	継続	
②	一條十四丁目	市内	鳥-三	継続	
②	上川	市外	鳥-四	継続	1930年版では分類①
②	四條十六丁目	市内	鳥-四	継続	
②	六條十六丁目	市内	鳥-四	継続	
②	八條十六丁目	市内	鳥-四	継続	
②	四條十五丁目	市内	鳥-四	継続	
②	四條十三丁目	市内	鳥-四	継続	
②	一條十二丁目	市内	鳥-四	継続	
②	一條九丁目	市内	鳥-四	継続	
②	駅前	市内	鳥-四	継続	1930年版では「旭川駅前」
②	美幌	市外	鳥-五	新規	網走本線・相生線の接続駅
②	網走	市外	鳥-五	継続	網走の誤記カ
②	比布	市外	鳥-五	継続	
②	永山	市外	鳥-五	継続	
②	六條九丁目	市内	鳥-五	継続	
②	四條十一丁目	市内	鳥-五	継続	
②	四條九丁目	市内	鳥-五	継続	
②	四條八丁目	市内	鳥-五	継続	
②	四條七丁目	市内	鳥-五	継続	
②	三條九丁目	市内	鳥-五	継続	
②	一條八丁目	市内	鳥-五	継続	
②	一條六丁目	市内	鳥-五	継続	
②	一條四丁目	市内	鳥-五	継続	
②	稚内	市外	鳥-六	継続	
②	樺太	市外	鳥-六	継続	1930年版では分類④
②	六号終点	市内	鳥-六	継続	
②	衛戍病院前	市内	鳥-六	継続	
②	工兵隊前	市内	鳥-六	継続	
②	野砲隊前	市内	鳥-六	継続	
②	八條八丁目	市内	鳥-六	継続	
②	常盤町	市内	鳥-六	継続	1930年版では「常磐町」
②	四條五丁目	市内	鳥-六	継続	
②	公園前	市内	鳥-六	継続	1930年版では「公園通」
②	四條二丁目	市内	鳥-六	継続	
②	一條二丁目	市内	鳥-六	継続	
②	三條二丁目	市内	鳥-六	継続	
②	一條一丁目	市内	鳥-六	継続	
②	曙終点	市内	鳥-六	継続	
②	騎兵隊前	市内	鳥-七	継続	
②	司令部前	市内	鳥-七	継続	
②	二十七八前	市内	鳥-七	継続	
②	二十六七前	市内	鳥-七	継続	
②	招魂社前	市内	鳥-七	継続	
②	大町四丁目	市内	鳥-七	継続	
②	大町六丁目	市内	鳥-七	継続	
②	大町八丁目	市内	鳥-七	継続	
②	憲兵隊前	市内	鳥-七	継続	
②	大町十丁目	市内	鳥-七	継続	
②	大町病院前	市内	鳥-七	継続	

分類	地名	市内外	位置	比較	備考
②	大町郵便局前	市内	鳥-七	継続	
②	旭橋下	市内	鳥-七	継続	
②	旭町	市内	鳥-七	継続	
②	東京	市外	鳥-八	継続	1930年版では分類①
②	青森	市外	鳥-八	継続	1930年版では分類①
②	函館	市外	鳥-八	継続	1930年版では分類①
②	小樽	市外	鳥-八	継続	1930年版では分類①
②	札幌	市外	鳥-八	継続	1930年版では分類①
②	室蘭	市外	鳥-八	継続	
②	苫小牧	市外	鳥-八	新規	室蘭本線と日高線の接続駅
②	岩見澤	市外	鳥-八	継続	
②	増毛	市外	鳥-八	継続	
②	留萌	市外	鳥-八	継続	1930年版では分類①
②	昭和	市外	鳥-八	新規	1930年開通。留萌鉄道の終着駅
②	恵比島	市外	鳥-八	継続	1930年開通。留萌鉄道の始発駅
②	石狩沼田	市外	鳥-八	新規	1931年開業。留萌本線と札沼線の接続駅。
②	瀧川	市外	鳥-八	継続	根室本線と函館本線の接続駅
②	深川	市外	鳥-八	継続	函館本線・幌加内線・留萌本線の接続駅
②	近文	市内	鳥-八	継続	
②	神居古潭	市外	鳥-八	継続	
③	天人峽	市外	鳥-一	継続	1934年指定の国立公園内
③	大雪山国立公園	市外	鳥-二	継続	大雪山から表記変更
③	神楽岡公園	市外	鳥-二	継続	
③	層雲峽	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
③	常盤公園	市内	鳥-六	継続	1930年版では「常磐公園」
③	第七師團	市内	鳥-七	継続	
③	神居古潭	市外	鳥-八	継続	
④	十勝岳	市外	鳥-一	継続	1934年指定の国立公園内
④	敷島ノ瀧	市外	鳥-一	継続	1934年指定の国立公園内
④	羽衣ノ瀧	市外	鳥-一	継続	1934年指定の国立公園内
④	松山温泉	市外	鳥-一	継続	1934年指定の国立公園内
④	石室	市外	鳥-一	新規	1934年指定の国立公園内
④	前旭岳	市外	鳥-一	新規	1934年指定の国立公園内
④	大正橋	市外	鳥-一	継続	旭川市境界付近
④	屠場	市内	鳥-一	新規	
④	旭岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	後旭岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	北海岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	白雲岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	大噴火口	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	熊ヶ岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	雲ノ平	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	石室	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	永山岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	北布岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内にある比布岳の誤記カ。
④	鋸岳	市外	鳥-二	新規	1934年指定の国立公園内
④	凌雲岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	愛別岳	市外	鳥-二	継続	1934年指定の国立公園内
④	沼平	市外	鳥-二	新規	1934年指定の国立公園内
④	愛山溪温泉	市外	鳥-二	新規	1934年指定の国立公園内。昭和8年頃に直井温泉から改称
④	岐登山	市外	鳥-二	継続	
④	啓明小学校	市内	鳥-二	継続	
④	運動場	市外	鳥-二	継続	
④	上川神社	市外	鳥-二	継続	
④	記念碑	市外	鳥-二	継続	「神楽岡史蹟記念碑」から表記変更
④	黒岳	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
④	烏帽子岳	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
④	御花畠	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
④	塩谷温泉	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
④	層雲閣	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内

田中祐未 吉田初三郎と印刷折本『旭川市』「旭川市大鳥瞰図」(1936年)

分類	地名	市内外	位置	比較	備考
④	天狗引白	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
④	流星ノ瀧	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
④	銀河ノ瀧	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
④	桂月岳	市外	鳥-三	継続	1934年指定の国立公園内
④	旭山公園	市外	鳥-三	継続	
④	朝日小学校	市内	鳥-三	継続	
④	放送局	市内	鳥-三	新規	1933年放送開始
④	神楽橋	衾衾	鳥-三	継続	神楽村との境界
④	美瑛川	市外	鳥-三	継続	
④	小函	市外	鳥-四	継続	1934年指定の国立公園内
④	大函	市外	鳥-四	継続	1934年指定の国立公園内
④	ニセイカウシユベ	市外	鳥-四	継続	1934年指定の国立公園内
④	至池田	市外	鳥-四	継続	位置大幅変更
④	新旭橋	市内	鳥-四	継続	
④	市立高等学校	市内	鳥-四	継続	1935年北都高等学校から名称変更
④	妙法寺	市内	鳥-四	継続	
④	大成小学校	市内	鳥-四	継続	
④	職業紹介所	市内	鳥-四	継続	
④	日新小学校	市内	鳥-四	新規	1931年創立
④	鉄道事務所	市内	鳥-四	継続	
④	忠別川	衾衾	鳥-四	継続	市町村界
④	御料苗圃	市外	鳥-四	継続	
④	暢生園	市外	鳥-四	継続	
④	阿寒湖	市外	鳥-五	新規	1934年指定の国立公園区域内
④	屈斜路湖	市外	鳥-五	新規	1934年指定の国立公園区域内
④	阿寒国立公園	市外	鳥-五	新規	1934年指定の国立公園区域内
④	至釧路	市外	鳥-五	継続	1930年版から位置大幅変更
④	摩周湖	市外	鳥-五	新規	1934年指定の国立公園区域内
④	秋月橋	衾衾	鳥-五	新規	1932年より旭川市の所管
④	正和小学校	市内	鳥-五	新規	1932年旭川市に編入
④	農事試験所	市外	鳥-五	継続	1930年版では「農業試験場」
④	農学校	市外	鳥-五	継続	1930年版では「農業学校」
④	日出橋	市内	鳥-五	継続	
④	牛朱別川	市内	鳥-五	継続	
④	裁判所	市内	鳥-五	継続	
④	公設質屋	市内	鳥-五	新規	1930年開業
④	土木事務所	市内	鳥-五	継続	
④	測候所	市内	鳥-五	継続	
④	中学校	市内	鳥-五	継続	1930年版では「旭川中学校」
④	上川支廳	市内	鳥-五	継続	
④	森林事務所	市内	鳥-五	継続	
④	営林署	市内	鳥-五	継続	
④	中央小学校	市内	鳥-五	継続	
④	税務署	市内	鳥-五	継続	
④	警察署	市内	鳥-五	継続	
④	郵便局	市内	鳥-五	継続	
④	商工会議所	市内	鳥-五	継続	
④	市診療所	市内	鳥-五	新規	1933年移転
④	農検支所	市内	鳥-五	継続	
④	師團道路	市内	鳥-五	継続	
④	東本願寺別院	市内	鳥-五	継続	
④	養生院	市内	鳥-五	新規	養老院の誤記カ。1932年開院。
④	美瑛橋	市外	鳥-五	継続	
④	忠別橋	衾衾	鳥-五	継続	神楽村との境界
④	衛戍病院	市内	鳥-六	継続	
④	市営プール	市内	鳥-六	新規	1935年開場
④	市営野球グラウンド	市内	鳥-六	新規	1931年新設
④	北鎮兵事記念館	市内	鳥-六	新規	1936年開館
④	招魂社	市内	鳥-六	継続	
④	金星橋	市内	鳥-六	新規	1934年竣工
④	中島遊廓	市内	鳥-六	継続	1932年旭川市に編入
④	石狩川	市内	鳥-六	継続	
④	旭橋	市内	鳥-六	継続	1932年橋架替

分類	地名	市内外	位置	比較	備考
④	武徳殿	市内	鳥-六	継続	
④	日幸小学校	市内	鳥-六	継続	日章小学校の誤記カ
④	高等女学校	市内	鳥-六	継続	1930年版では「旭川高等女学校」
④	慶誠寺	市内	鳥-六	継続	
④	大休寺	市内	鳥-六	継続	
④	眞久寺	市内	鳥-六	継続	1930年版では「成田山眞久寺」
④	赤十字病院	市内	鳥-六	継続	
④	青雲小学校	市内	鳥-六	継続	
④	翠香園	市内	鳥-六	継続	
④	商業学校	市内	鳥-六	継続	
④	司令部	市内	鳥-七	継続	
④	偕行社	市内	鳥-七	継続	
④	歩兵第廿八聯隊	市内	鳥-七	継続	
④	鷹栖公園	市外	鳥-七	新規	
④	歩兵第廿七聯隊	市内	鳥-七	継続	
④	歩兵第廿六聯隊	市内	鳥-七	継続	
④	御野立所	市外	鳥-七	継続	
④	春光台	市外	鳥-七	継続	
④	忠霊塔	市外	鳥-七	新規	1936年完成
④	練兵場	市内	鳥-七	継続	
④	憲兵隊	市内	鳥-七	継続	
④	射的場	市内	鳥-七	継続	
④	近文演習場	市外	鳥-七	継続	
④	陸軍墓地	市外	鳥-七	継続	
④	大有小学校	市内	鳥-七	継続	1933年に新北門小学校から名称変更
④	師範附属小学校	市内	鳥-七	継続	
④	新橋	市内	鳥-七	継続	
④	新町	市内	鳥-七	継続	
④	至帯廣	市外	鳥-八	継続	1930年版では分類②、「帯廣」
④	幌加内	市外	鳥-八	継続	1930年版では分類②
④	師範学校	市内	鳥-八	継続	
④	近文小学校	市内	鳥-八	継続	
その他	市役所	市内	鳥-五	継続	

凡例：

- ・「比較」の列について、「継続」は1930年版と1936年版の両方に掲載された地名、「新規」は1936年版のみに掲載された地名を示す。
- ・「市内外」の列について、1936年時点で旭川市内の場合は「市内」、旭川市外の場合は「市外」とした。
- ・作成にあたって、本稿の旭川市域トレース図のほか、(北海道景勝地協会 1936) (鉄道省 1936) (鉄道省 1937) (旭川市史編集委員会 1959) (旭川市永山町史編集委員会 1981) (旭川市史編集会議 2012) (新潮社 2008)、『旭川市勢要覧』(1936年)付属の「旭川市全図」、「地方幸旭川市市内御道筋図」(1936年)を参照した。

表4 「旭川市を中心とする名所交通鳥瞰図」(1930年)に掲載されているが「旭川市大鳥瞰図」(1936年)には掲載されていない地名一覧

分類	地名	位置	市内外	備考
④	志比内発電所	鳥-一	市外	
④	忠別発電所	鳥-一	市外	
④	狩勝峠	鳥-一	市外	
④	十勝川	鳥-一	市外	
④	千島列島	鳥-一	市外	
④	カムチヤツカ	鳥-一	市外	
③	狩勝高原	鳥-一	市外	
④	磐ノ澤	鳥-一	市外	大雪山周辺
④	天人ヶ原	鳥-一	市外	大雪山周辺
④	幣ノ瀧	鳥-一	市外	大雪山周辺
④	忠別岳	鳥-一	市外	大雪山周辺
④	トムラウシ山	鳥-一	市外	大雪山周辺
④	富麻岳	鳥-一	市外	大雪山周辺
②	上土幌	鳥-一	市外	鉄道の駅名
②	下富良野	鳥-一	市外	鉄道の駅名
②	至滝川	鳥-一	市外	
②	中湧別	鳥-一	市外	鉄道の駅名
②	斜里	鳥-一	市外	鉄道の駅名
②	根室	鳥-一	市外	鉄道の駅名
④	リ、一名所	鳥-一	市外	
④	義経台	鳥-一	市外	
②	遊園地	鳥-一	市外	路面電車の停留場名
②	西川	鳥-一	市外	路面電車の停留場名
②	上東川	鳥-一	市外	路面電車の停留場名(予定駅)カ
④	合同酒精會社	鳥-二	市内	
④	楯岩	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	阿吽峯	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	横雲峰	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	蓬萊閣	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	流星峯	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	陸軍療養所	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	神城峯	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	映月峰	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	大雪山登山口	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	赤岳	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	小泉岳	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	間宮岳	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	荒井岳	鳥-二	市外	大雪山周辺
④	松田岳	鳥-二	市外	大雪山周辺
②	美瑛	鳥-二	市外	鉄道の駅名
②	邊別	鳥-二	市外	鉄道の駅名
④	リ、一名所	鳥-二	市外	
②	下公有地	鳥-二	市外	路面電車の停留場名
②	公有地	鳥-二	市外	路面電車の停留場名
②	早稲田	鳥-二	市外	路面電車の停留場名
②	観音	鳥-二	市外	路面電車の停留場名
②	坂上	鳥-二	市外	路面電車の停留場名
②	旭正	鳥-二	市外	路面電車の停留場名
②	上公有地	鳥-二	市外	路面電車の停留場名
②	御料道	鳥-二	市外	路面電車の停留場名
④	小檜山酒造場	鳥-三	市内	
②	旭川一条	鳥-三	市内	路面電車の停留場名
④	旭川電気軌道会社	鳥-三	市内	
④	上川発電所	鳥-三	市外	
④	愛別安足間両発電所	鳥-三	市外	
④	夫婦岩	鳥-三	市外	大雪山周辺
④	不忘峰	鳥-三	市外	大雪山周辺
④	夏雲峰	鳥-三	市外	大雪山周辺
④	観月峰	鳥-三	市外	大雪山周辺
④	新大函	鳥-三	市外	大雪山周辺
②	中越	鳥-三	市外	鉄道の駅名
②	中愛別	鳥-三	市外	鉄道の駅名
②	愛別	鳥-三	市外	鉄道の駅名
②	伊香牛	鳥-三	市外	鉄道の駅名
②	富麻	鳥-三	市外	鉄道の駅名
②	櫻岡	鳥-三	市外	鉄道の駅名
②	永山道	鳥-三	市外	路面電車の停留場名
④	北の譽醸造元	鳥-四	市内	
④	北日本醸造會社	鳥-四	市内	

分類	地名	位置	市内外	備考
④	北電旭川事ム所	鳥-四	市内	
②	至遠軽	鳥-四	市外	
②	至網走	鳥-四	市外	
②	名寄	鳥-四	市外	鉄道の駅名
②	和寒	鳥-四	市外	鉄道の駅名
②	大泊	鳥-五	市外	
④	競馬場	鳥-五	市内	
④	ヤンマー発動機支店	鳥-五	市内	
④	電話交換局	鳥-五	市内	
④	大谷酒造店	鳥-五	市内	
④	日本清酒會社	鳥-五	市内	
④	架橋演習場	鳥-五	市内	
④	工兵第七大隊	鳥-五	市内	
④	輜重兵第七大隊	鳥-五	市内	
④	野砲兵第七聯隊	鳥-五	市内	
②	音威子府	鳥-五	市外	鉄道の駅名
②	蘭留	鳥-五	市外	鉄道の駅名
②	浦塩	鳥-六	市外	
④	スキー場	鳥-六	市外	
④	上川神社頓宮	鳥-六	市内	
④	曙遊廓	鳥-六	市内	
④	騎兵第七聯隊	鳥-六	市内	
④	北嶺小学校	鳥-六	市内	
④	伊ノ沢スキー場	鳥-七	市外	
④	旧土人模範農場事ム所	鳥-七	市内	
④	木管會社	鳥-七	市内	
④	旭ヶ丘	鳥-七	市外	
②	下関	鳥-七	市外	
②	釜山	鳥-七	市外	
②	京城	鳥-七	市外	
②	仁川	鳥-七	市外	
②	清津	鳥-七	市外	
④	朝鮮	鳥-七	市外	
④	金剛山	鳥-七	市外	
④	白頭山	鳥-七	市外	
②	羽幌	鳥-七	市外	鉄道の駅名
④	半面山	鳥-七	市外	
①	留萌港	鳥-七	市外	
④	留萌鉄道社線	鳥-七	市外	
④	町役場	鳥-七	市外	
②	神戸	鳥-八	市外	
②	大阪	鳥-八	市外	
②	京都	鳥-八	市外	
②	名古屋	鳥-八	市外	
②	仙台	鳥-八	市外	
②	新潟	鳥-八	市外	
②	伏木	鳥-八	市外	
④	至下富良野	鳥-八	市外	
④	嵐山	鳥-八	市外	
②	長万部	鳥-八	市外	鉄道の駅名
②	定山溪	鳥-八	市外	鉄道の駅名
②	砂川	鳥-八	市外	鉄道の駅名
②	納内	鳥-八	市外	鉄道の駅名
②	伊納	鳥-八	市外	鉄道の駅名
②	幌新	鳥-八	市外	
②	浅野	鳥-八	市外	
②	明治	鳥-八	市外	
②	三井	鳥-八	市外	
④	海水浴場	鳥-八	市外	
④	留萌鉄道社線	鳥-八	市外	
④	雨龍炭田	鳥-八	市外	

凡例：

・「市内外」の列について、1936年時点で旭川市内の場合は「市内」、旭川市外の場合は「市外」とした。作成にあたって、本稿の旭川市域トレース図のほか、(鉄道省 1935)、『伸びゆく旭川』(1929年、旭川商工会議所発行)所収の「旭川市全図」、「旭川市全図」(1931年、旭川市役所発行)、『旭川市勢要覧』(1936年、旭川市役所発行)付属の「旭川市全図」を参照した。

## Yoshida Hatsusaburo and “Asahikawa-shi Daichōkanzu” (“A Grand Bird’s-eye View Map of Asahikawa”) in the Printed Folding Book *Asahikawa-shi* (1936)

TANAKA Yumi

---

This study examines the contents of the printed folding book *Asahikawa-shi* (published by Asahikawa City Hall in 1936) and “Asahikawa-shi Daichōkanzu” (“A Grand Bird’s-eye View Map of Asahikawa”) found within. The analysis is conducted through a detailed comparison with *Asahikawa* (published by the Asahikawa Chamber of Commerce and Industry in 1930) and “Asahikawa-shi wo Chūshin to seru Meisho Kōtsū Chōkanzu” (“Bird’s eye Sightseeing and Route Map of Asahikawa”).

Findings of analysis revealed the following characteristics:

- (1) While the overall format and layout of the printed folding books remained largely unchanged between the two publications, in the 1936 version, sections corresponding

to illustrated works by Yoshida Hatsusaburo have been updated.

- (2) The 1930 publication emphasizes Asahikawa’s connections with the surrounding regions, whereas the 1936 publication places greater focus on Asahikawa itself and the Daisetsuzan National Park area, with less information about other regions.

Despite both depicting the same subject of Asahikawa, the two works exhibit notable differences in terrain perspective techniques, style of place names, and coloring. Moving forward, further analyses of similar works will be necessary to identify aspects such as changes in the expressive style of Yoshida Hatsusaburo’s works.

